



促成ピーマンにおける ナスコナカイガラムシの残さ中への残存



写真1 採取した1株当たりのピーマン残さ



写真2 残さに残ったナスコナカイガラムシ

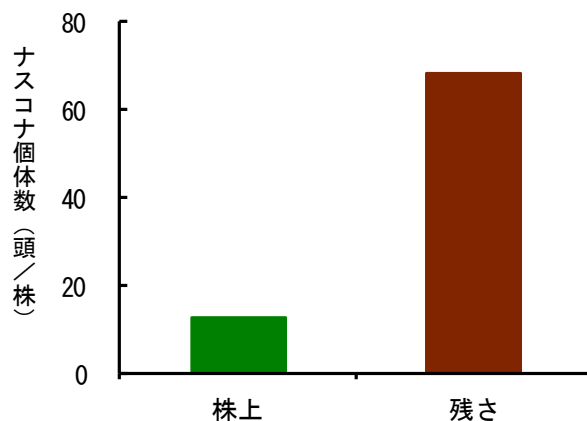


図1 現地促成ピーマンほ場におけるナスコナカイガラムシの残さ中への残存

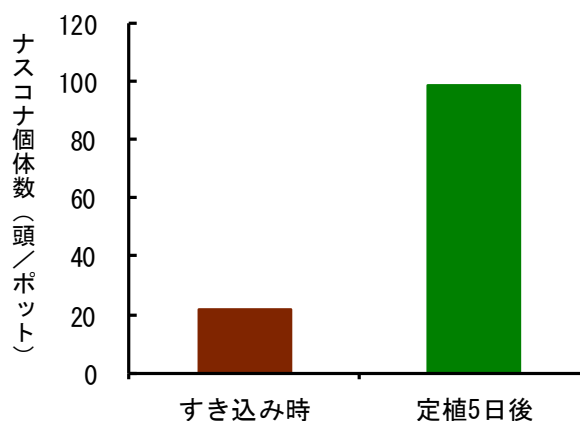


図2 残さと共にすき込まれたナスコナカイガラムシが次作の発生に及ぼす影響

高知県の促成ピーマン類等では、コナカイガラムシ類による被害が増加しています。ナスコナカイガラムシ(以下、ナスコナ)に有効かつ天敵に影響が小さい殺虫剤は限られていますが、現地では、防除後に密度が低下しても1ヶ月程度で再発してしまう事例が見られます。そこで、施設内の残さに注目し、残さがナスコナの発生源となるのかを調べました。

まず、ピーマンの株上と株元の残さに寄生するナスコナを調査したところ、残さでは株上の5倍以上のナスコナが確認されました(写真1、2、図1)。次に、ナスコナが寄生したピーマン残さをポット内の土に混ぜ込み、2週間後にピーマンを定植したところ、定植5日後に99頭/ポット(ピーマン株上)の

ナスコナが確認されました(図2)。

以上のことから、ピーマンを薬剤防除しても、残さに残ったナスコナがピーマンの株上に移動してくることで、再び密度が高まっていると考えられました。また、栽培終了後に施設内の残さに残存するナスコナが次作の発生源になっている可能性が高いと考えられました。ナスコナの密度を抑えるためには、寄生葉や残さ等を除去し、適切に処分することが重要であると考えられます。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「IoP(Internet of Plants)」が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化」の助成を受けたものです。

(昆虫担当 米津 聡浩 088-863-4915)